

Title	名詞句による疑問文に関する考察
Author(s)	湯通堂, 誠
Citation	日本語・日本文化. 2000, 26, p. 71-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5606
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究ノート>

名詞句による疑問文に関する考察

湯通堂 誠

0. 「名詞句による疑問文」について

本稿が考察の対象とするのは、日本語の会話における、次のようなやりとりで発生する名詞句一個を用いての疑問文についてである。

(1) A: 太郎が来たよ。

B: 太郎が?

(例文中の“?”は上昇イントネーションを伴うことを示す。)

(1)のBの発話が名詞句一個を用いた疑問文である。この(1)のBの発話が発生する環境としては、まず、例の(1)のAに相当する、なんらかの情報提供が前もって行われていること、次に、その情報提供に関して、(1)のBの話し手のように、事態が容易に理解できない、信じられないなどにより、再度確認を要するといった状況が発生していることが考えられる。つまり、まず(1)のAの話し手が「太郎が来た」という情報を聞き手に対して提供する。それに対して、その聞き手であった(1)のBの話し手は「Xが来た」という動作の主が「太郎」であったということに関して、容易に理解できないなどの状況になっている、と解釈できる。そこで、容易に理解できない、ということの表明と、(1)のAの話し手に対する確認の意味を込めて、(1)のBのような発話を行うのである。

本稿の考察の範囲としては、以上のような文の補語として提出された語による情報に対する疑問文を扱うことにする。従って例えば、

(2) A: 太郎が幹事だよ。

B: 幹事?

といった、名詞述語の名詞部分に対するもの、あるいは本来述語の一部を形成するはずのものに関する議論はここでは扱わない。

以下の考察は、このような環境で発話される疑問文についてのものである。

1. 「が」と「は」

1. 1 「Xが?」と未知の情報

さて、(1) で用いられた例文では、Bの発話の中に格助詞の「が」が用いられていた。そこでまず、「Xが?」と格助詞「が」で終わる「聞き返し」の疑問文について考えてみる。

次のような例を見てみる。

(3) A: —昨日ディノ・ゴルツイネが訪れたそうです

B: ゴルツイネが? (B)

(3) の例ではAの発話として「ディノ・ゴルツイネが」というのがあり、それと全く同じに、Bによる「ゴルツイネが」という発話につながっている。さて、ここで「が」が使われなければならない理由は何であるか。

(3) のBの発話は単なる「おうむ返し」ではなく、「が」が文法のルールに則って、適切に選ばれて使われているという証拠はいくつかあげられる。

まず、「が」の用法は様々議論されているが、ここで最も適切な解釈のしかたとして考えられるのは、久野 (1973) などで議論されている「未知」もしくは「新情報」としての「が」の用法であろう。例えば、次のような使い方に、それはあらわれる。

(4) A: 彼がどこへ行ったか——君は知ってるんじゃないのか?

B: ほか? どうして? (B)

(4) のAの発話は「Xは知ってるんじゃないのか?」という問いかけで、Aの話し手はX=「君 (Bの話し手「はく」)」と仮に設定して疑問文として発したわけである。だが、Bの話し手はその設定のしかた、つまり、Aによる疑問文のもとになる命題の設定で、「Xが知っている」のX=Bの話し手、がBにとっては理解できなかった(「とほけて」いる場合も含む)ことにより再度確認を要する、ということになる。このことからBにとっての「新情報」を示す「はくが?」という発話につながるのである。したがって、(4)のBで「おうむ返し」に「はくは?」と発話することはできない。

このような例として、次の例を見てみる。

- (5) A: おっさんこそどうしたんだよ やけにイラついてンじゃんか
 B: オ… オレが!? ばかいえ そんなことあるもんか! (B)

(5)で、Aの「おっさん」はBの「オレ」である。(5)のAでは「…こそ」が用いられているが、「聞き返し」の(5)のBでは「オレが」となる。「こそ」も「は」と同じくとりたて助詞であるが、やはり「新情報」を扱う際には用いることはできない。(5)のAの発話では「おっさん (=Bの「オレ」) がイラついている」という命題の設定であるため、これに対する「聞き返し」としてのBの「オレが?」が発話されているからである。

命題の設定に対する「聞き返し」ということであれば、次のような例も同じような扱いとなるだろう。

- (6) A: …またお目にかかりましたねムッシュウ
 「ニュース・ウィーク」の記事を書いたのは私です
 B: …君が? (B)

(6)のAの発話の後半、「「ニュース・ウィーク」の記事を書いたのは私です」は強調構文である。この文の命題の設定という点で見れば、「Xが「ニュース・ウィーク」の記事を書いた」となり、「X=私 (Bの「君」)」となる。そこで、

(6) のBの「聞き返し」疑問文は「君が?」となるのである。

ここまでの考察で、「聞き返し」の疑問文に先行する文において、「は」などのとりたて助詞が用いられていたり、強調構文が用いられていたとしても、「聞き返し」の疑問文は先行する文の命題の設定に疑問をさしはさみ、再度確認を行うものであるため、「新情報」として「が」が付けられる性質があることがわかった。

なお、「聞き返し」の疑問文に先行する文の命題部分に対して、「聞き返し」の疑問文はそれと全く同じものでなければならないということもない。例えば次の例を見ると、

(7) A: 閣議中、お邪魔して申しわけありません。

384 便には、フランクフルト基地の米軍家族五十名が乗っております。

B: 米軍基地の家族が!? (P)

このように、先行する文では「フランクフルト基地の米軍家族五十名が…」とあるのだが、「聞き返し」の疑問文では「米軍基地の家族が?」と若干違った言い回しになっている。これは、先行する文の命題に含まれる情報の概要が「聞き返し」の疑問文と重なっていれば、「聞き返し」の疑問文が成立するわけで、このことから、「聞き返し」の疑問文は単なる「おうむ返し」ではないということが言える。

1. 2 「Xは?」の疑問文

さて、それでは「聞き返し」の疑問文に「は」が現れることはないのか。次のような例を見てみる。

(8) A: 遅いぞチャーリー!

B: すまない 車がこわれてタクシーで来た
状況は?

A: まるでカーニバルさ

ガキどもがいっせいに動きだしやがった

B: 警部は?

A: オペレーション・ルームだ お目玉をくらうぞ! (B)

(8) のはじめのBの発話で、「状況は?」ということで話題を切り替え、また次のBの発話「警部は?」でまた話題が切り替わる。つまりそれぞれ先行するAの発話に対して疑問をさしはさむことなく、次の話題へと進んでいるのである。したがって、本稿における「聞き返しの疑問文」の定義を、先行する発話における命題の提示に対して疑問をさしはさみ、再度確認を行うもの、とするならば、「Xは?」という「は」で終わる疑問文は「聞き返し」の疑問文として扱うことはできないのである。

ならば、「Xは?」の疑問文はどのような性質を持つのか。

(9) A: チャイニーズの連中が手助けしてくれたのさ! 連中は連中で
ショーターを助ける気なんだ

B: …で 連中は?

A: それが急にどっかいなくなっちゃまってよ (B)

(9) の例で、最初のAの発話中に「連中は…」と出て来ているが、それに続くBの発話の「連中は?」とは扱っている情報としては別物である。それを明示するために「…で」と話題の転換を示す接続の成分が付いている。(9) のBの「連中は?」は「連中は (今どうしているか)?」といった疑問文の省略された形と見た方がよさそうである。

(10) A: …何時?

B: 5時半 もう夜が明けるよ

A: おまえ 傷は?

B: 大丈夫みたいだ たいしたことないよ (B)

この (10) の場合も、2 番目の A の発話は「傷は (どうなったか) ?」という疑問文の省略と見ることができる。「が」を用いた「聞き返し」の疑問文はどうであったか。再び (3) を見てみる。

(3) A : — 昨日ディノ・ゴルツイネが訪れたそうです

B : ゴルツイネが? (B)

この場合「ゴルツイネが (訪れたのか) ?」という疑問文の省略と見るのは妥当ではない。なぜなら (10) の場合、「傷は (どうなったのか) ?」という疑問文の省略と見ることができたのは、この疑問文によって話し手が得たい情報は括弧内の「どうなったのか」という部分であるのに対し、(3) の場合は話し手はすでに「ゴルツイネが (訪れたのか) ?」の括弧内の部分に関しては情報として取り入れ済みであって、ただ「X が (訪れた)」の X 部分に「ゴルツイネ」が入っていることに再度確認の必要を感じただけである。

以上のことから、「名詞+が+?」という形を持つ疑問文は、それに先行する文における命題の設定「X が…述語」のうち、X の設定のしかたに関して再確認を行うものであるといえる。一方、「名詞+は+?」という形の疑問文は、それに先行する文における命題の設定を受け入れた上で、話題を次へと転換させ「名詞+は (+どうなったのか) +?」などといった質問をなすものと言える。

2. その他の助詞の場合

前項で「X が?」という「聞き返し」疑問文について観察したが、ここで見られた特徴は「が」で終わる「聞き返し」疑問文だけのものであろうか。次の例は「を」で終わっている疑問文である。

(11) A : ラーメンたべようか!

B : ラーメンを! ? (999)

(11) の A の発話で「ラーメン (を) たべようか!」とあったのに続いて、B

は「Xをたべようか」のXに「ラーメン」が入っていることに対して再度確認する意図で発話されたものである。そうであるならば、(11)のBの「Xを？」という疑問文も、「Xが？」と同じように「聞き返し」の疑問文であるということが出来る。

(12) A: ショーター… あのユーシスってヤツを調べられるか?

B: あいつを? 何か気になるのか? (B)

(12)のAの発話の「あのユーシスってヤツ」はBの「あいつ」と同一である。この(12)のAの発話における命題の設定は「YがXを調べられる」となっていて、Y = 「ショーター」、X = 「あのユーシスってヤツ」となる。ここで、(12)のBの話し手(ショーター)は次の(12')のような「聞き返し」をすることもできた。

(12') A: ショーター… あのユーシスってヤツを調べられるか?

B: オレが?

(12')においてはAの命題の設定のYに対する「聞き返し」である。しかし、(12)では、「聞き返し」の項目としてYではなくXを選んだだけで、どちらを選んだとしても「聞き返し」の疑問文の性質は変わらない。どちらにしても命題の設定に対する確認という点は同じだからである。

この点から見ても、「Xを？」の「聞き返し」の疑問文は「Xが？」と性質を同じくする。そして、確認の意図を持って発話されているということは、「が」が「新情報」を扱っているのと同様に、この「を」もまた「新情報」を扱っているということが出来るのではないか。

その他の助詞を用いた場合も見ながら考察をすすめる。つづいては「に」について。

(13) A: あげるわといった時のきみの顔はほくのお母さんにそっくりだった…

B ; お母さんに? あなたの

(999)

この (13) の例では、Aの発話の命題の設定として「YがXにそっくりだった」のXの部分に「(ぼくの) お母さん」が入っているのだが、それに対する確認の意図でBの「お母さんに?」という発話がなされている。もちろん、Yの部分に入っているはずの「(あげるわといった時の) きみの顔」に対する「聞き返し」も可能である。

(13) A : あげるわといった時のきみの顔はぼくのお母さんにそっくりだった…

B : わたしの顔が?

したがって、やはりこれも「Xが?」や「Xを?」と同じパターンの「聞き返し」の疑問文ということができる。

さらに「の」について。

(14) A : あ…ぼくは—— 日本人なんだ アッシュの友だちで…

B : 友だち? アッシュの? (B)

この (14) の例のBの発話の後半「アッシュの?」もここまで見てきた「Xが?」、「Xを?」、「Xに?」と同じように解釈できる。

以上の考察をまとめると、「X+格助詞+? (上昇イントネーション)」という形の「聞き返し」疑問文は、先行する文の中で示されていた情報の一部、Xに関して、そのXが関わる命題の設定について再度確認を行う、という点で助詞の違いはあれ共通の性質を持っているということができる。

そうであるならば、「Xが?」という形をもつ「聞き返し」の疑問文の場合、少なくとも「聞き返し」疑問文の話し手にとってはXに関する情報の設定について「新情報」のものと考えられているわけだから、共通の性質を持つ「X+格助詞+?」のその他の格助詞についても「新情報」を示す印として用いられてい

ると考えられる。

「が」以外の助詞の「新情報」を示す印としての用法は、ここまで例に挙げた会話の文体に限らず、次のような書き言葉の文体にも見られるものである。

- (15) この情勢をみて、天皇は伯耆の名和長年をたよって隠岐を脱し、幕府はこれを攻めるため足利高氏をつかわした。高氏のはかねて北条氏にとってかわる野心をいっていたので… (日)

「足利高氏をつかわした。」の部分が、この文章における高氏の初登場であり、ここに「を」が用いられているが、その次から「高氏は…」となる。ここで初出の「足利高氏」に「を」が付けられ、これにつづく「高氏」に「は」が付けられていることから、この「を」が「新情報」を表していると言えるだろう。

3. 格助詞が付かない場合

前項までは「X+格助詞+? (上昇イントネーション)」という形を持つ「聞き返し」疑問文について見てきた。つづいてここでは、格助詞が付かずに「X+?」とXに直接上昇イントネーションが続く形を見ていくことにする。

まず、次のような例を見てみる。

- (16) A: はくはシンのボスのユーシスに会いたいんだ
 シンならきっとあいつの居場所を知っている
 B: ユーシス? 誰だそりゃあ (B)

(16) の例を見ると、Bの話し手はAの発話で出てきた「ユーシス」という人名に関して全く情報を持っていない、ということが言える。そこで、Aの発話中にあった「ユーシス」という語を単純に「おうむ返し」し、それに関するさらなる説明を求めたと考えられる。したがって、例えば次の例のようなことも起こる。

- (17) A: “出雲”って神様の国なんだぜ

B: ギズモ?

A: ちがうよ それじゃグレムリンだ (B)

(17) のBの話し手は、「出雲」という地名を全く初めて聞いたので、正確な「おうむ返し」ができなかったという例である。

これら (16)、(17) に見られた例は、それぞれBの話し手がその語を知らない、従ってそれが何を指し示すものかもしい浮かばないという状況で、さらなる説明を求める意味での「おうむ返し」であり、ここまで考察を加えてきた「聞き返し」の文とは性質を異にする。

語についての単なる「おうむ返し」なので、助詞をつけるとニュアンスが異なってしまう。

(18) A: 暗くなるのを待って、ルフトハンザ機の背後から近づく……

ドアを破り、スタングレネードを叩き込み、奴らをかく乱して、犯人全員を射殺する。

わずか数分間で作戦は完了するさ。

B: スタングレネード?

A: 音だけを発する手榴弾だ。 (P)

もし、(18) のBの発話にAの文で用いられていた助詞の「を」が付いていたら、次のような文になる。

(18') A: 暗くなるのを待って、ルフトハンザ機の背後から近づく……

ドアを破り、スタングレネードを叩き込み、奴らをかく乱して、犯人全員を射殺する。

わずか数分間で作戦は完了するさ。

B: スタングレネードを?

(18') のBの発話であれば、Bの話し手は「スタングレネード」とは何物か

知っていて、それがAの発話に出てきたことに対して再度確認する、という意味で解釈されることになる。つまり、「Xを叩き込み、…」のX (=スタングレネード) は話し手にとってはこの会話の場での新情報ではあるが、スタングレネードという語自体はすでに知っている、と言える。

したがって、「X+?」とXに直接上昇イントネーションが続く形は、(18)のように「を」を用いないことによって、その語そのものについての情報を求めていると言える。

しかし、次のような例もある。

(19) A: 小型のドラム缶で、時計の音がします!!

B: 時計の音!? それなら原理的には解体可能だ!! (P)

(19) はAの話し手が時限爆弾の形状について、爆弾処理の専門家であるBの話し手に報告している、という場面である。この(19)の場合、次のようにBの疑問文にAの発話で用いられていた「が」を補うと、状況が変わってくる。

(19') A: 小型のドラム缶で、時計の音がします!!

B: 時計の音が!?

「が」が用いられていない(19)の場合、BはAによる報告から時限爆弾の形状や構造を瞬時に理解し、その解体方法を思い浮かべた状況が想定できる。しかし、(19')の場合、「時計の音」が聞こえたことに対しいくらかの驚きがあり、再度確認の必要を感じている様子に見える。

次の例も同じような状況の発話である。

(20) A: カ カゼをひいちゃって ゴホゴホゴホ

B: カゼ? そりゃーいけない僕がみてあげよう (B)

(20) のBの話し手は医者である。当然「カゼ」という語を知らないはずがな

い。したがって、この (20) の B の発話「カゼ?」や、(19) の「時計の音!？」は、(16) (17) (18) でみたような、全くその語を知らないために起こった「おうむ返し」ではなく、一種の「念押し」とでも言えるものであろう。つまり、(19) の場合「今きみは『時計の音』と言ったね。それなら…」という意味で使われている「時計の音!？」であると考えられる。

さらに、先ほど述べた二つの種類の「名詞+?」の他に、このようなものもある。

(21) A: トンネルへ入る前に食事をすませましょうよ 鉄郎!

B: トンネル?

この宇宙空間でトンネルへ入るってどういうことなんだい?

(999)

(21) の会話は宇宙空間で行われている。B の話し手は「トンネル」という語の意味は知っているのだが、この会話の場面と文脈から考えて、「トンネル」という語が会話に登場することに疑問を持っている、という状況である。

さらに、

(22) A: アッシュか? 今どこだ

B: 市立図書館の前だ

A: 図書館? なんてそんなところにいる

(B)

A は「図書館」を知っているのだが、B の話し手がなぜ「図書館」にいるのか、その必然性が分からない、というのである。これらはいわば、先ほど述べた二種の中間の存在で、「語彙的意味」においては「念押し」であるが、「文脈的」には「おうむ返し」であると言えるだろう。

最後に、次のような例もある。これは「言い換え」とでも呼べそうである。

(23) A: 明日の対イングランド戦でカカシになればと強迫電話がありました。

B：八百長!?

A：はい、

(P)

(23) の最初のAの発話中にある「カカシになれ」という部分が一般的な言い回しと異なり、Bが「八百長!？」と、一般的な言い回しに言い換えたのだが、その言い換えで正しいか確認しているものである。

以上の考察から、「名詞+？」の疑問文は「おうむ返し」、「念押し」、「言い換え」といった機能を持っているが、いずれも「名詞+格助詞+？」の「聞き返し」疑問文とは性質を異にするといえる。

4. まとめ・今後の課題

本稿で見てきた名詞句一個を用いての「聞き返し」疑問文の性質をまとめると、次のようになる。

まず、「名詞+格助詞+？」の形を持つもの。これは先行する文における命題の設定に対して疑問をさしはさみ、再度確認するものである。格助詞の種類は問わず、「が」においても「を」や「に」においてもこの性質は共通する。本稿ではこれを指して「聞き返し」と呼んだ。

次に、「名詞+は+？」の形を持つもの。これは先行する文の情報を受け取った上で、さらに先行する文にはない情報について「名詞+は（+どうなったのか等）+？」と別の話題に関して新たな質問を行うものである。

さらに、「名詞+？」の形を持つもの。この機能は文脈、場面に依存するが、本稿の観察からは「おうむ返し」、「念押し」、およびその両者を備えたもの、そして「言い換え」といった機能を持つものが見つけられた。

だが、残された問題は多い。まず、議論の最初で除外した述語に関するもの、それから引用との関連性、等が考えられる。また、本稿の議論の範疇でいえば、例えば次のようなものがある。

(24) A：太郎（の方）が英語がうまいよ。

B : 太郎が ?

(24) のような「名詞+格助詞+ ?」の「聞き返し」が可能であるのに対して、

(25) A : 太郎 (の方) が英語がうまいよ。

B : *英語が ? (註)

では、「名詞+格助詞+ ?」だが、これは不可であるということ。

さらに、

(26) A : 太郎が買った本を借りてきたよ。

B : *太郎が ?

と、関係節中の成分は「聞き返し」が不可になるのに対し、

(27) A : 太郎が花子と別れた噂を聞いたよ。

B : 太郎が ?

といった内容節なら「聞き返し」が可能になるという点もある。今後、考察を続けていきたい。

註

この「英語が ?」の場合、助詞「が」に強い強勢が加わった場合、容認度が高まる。

用例出典

(999) : 銀河鉄道 999 1巻 松本零士 少年画報社文庫

(B) : BANANA FISH 3~9巻 吉田秋生 小学館文庫

- (P) : パイナップル ARMY 1・3・5・6巻 工藤かずや／浦沢直樹 小学館文庫
(日) : 新編日本史 原書房

参考文献

- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
寺村秀夫・他編 (1987) 『ケーススタディ日本文法』桜楓社
野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版

〈キーワード〉名詞句による疑問文, 聞き返し, 命題の設定, 新情報

A Study of Japanese Interrogative Expression by Single Noun Phrase

Makoto YUTSUDO

In this article, I try to examine the nature of the Japanese interrogative expression using the single noun phrase. First, I determine the notion of the interrogative expression with the single noun phrase. This interrogative expression is made with a noun and a particle, and this is accompanied with rising intonation, like in the following example.

A: Taroo-ga kita yo.

B: Taroo-ga ?

In this example, B's response is the interrogative expression. Then, throughout the examination, I find that this kind of interrogative expression uses only case particles, like "-ga", that indicates "new information" for this speaker. And also other case particles, like "-o", "-ni", have the same property in this interrogative expression. This kind of interrogative expression implies that the speaker cannot accept the information that is given in the preceding utterance by another, or is confused by it, so that the speaker requires confirmation of the given information.

But if the speaker uses the topic particle, like "-wa", that carries a different meaning. The expression using a topic particle implies that the speaker already accepts the given information.

Furthermore, I also consider a similar interrogative expression, that doesn't include any particles. This kind of interrogative expression has various meanings, depends on the context. But it's not same as the interrogative expression using the case particle.